

令和 5 年 5 月 21 日現在

機関番号：25302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10222

研究課題名（和文）看護基礎教育における卒後の組織社会化促進に向けた予期的社会化尺度の開発

研究課題名（英文）Development of an Anticipatory Socialization Scale to Promote Organizational Socialization after Graduation in Basic Nursing Education

研究代表者

赤田 いづみ（AKADA, Izumi）

新見公立大学・健康科学部 看護学科・講師

研究者番号：40735875

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：看護学生の予期的社会化を、就職直前に抱く就職後の自身のイメージと捉え、そのイメージと就職後の現実との相違を明らかにした。その結果、看護学生の就職後の自身のイメージとして、【就職後の生活】、【仕事への順応】、【職場への適応】、【キャリアの基盤形成】の4つのコアカテゴリーが抽出され、就職後の現実のコアカテゴリーと一致した。それらの内容を比較すると、看護学生の就職後の自身のイメージにおいて、具体的となっていない部分が明確となった。そのイメージが看護基礎教育の期間で具体的になるような支援をすることで、リアリティショックを低減し離職を防ぐことに繋がること示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の看護基礎教育では、医療安全の観点から臨地実習で看護学生が実践可能な項目が制限されている。そのため、就職後の現実との相違が大きく、それが引き金となり、リアリティショックから離職につながることも少なくない。本研究は、看護学生の予期的社会化として、就職直前に抱く就職後の自身のイメージと、就職後の現実を明らかにし、その相違点を見出した。この結果は、看護基礎教育側からの支援を行う際と、就職先となる病院や施設から病院説明会などの情報提供の際の基礎資料になると考える。さらには、新人看護師の離職率を低減する一助になると考える。今後は、この結果を活用し、看護学生の予期的社会化の尺度を開発していきたい。

研究成果の概要（英文）：This study revealed the difference between the image of the employed nurse held by nursing students in the period just prior to employment and the reality after employment. As a result, four core categories (with 25 categories) related to participants' images of themselves as employed nurses were extracted: life after employment, adaptation to work, adaptation to the workplace, and career foundation-building. Fourteen categories were extracted regarding the reality that nurses found after employment; upon comparing and classifying these categories according to the four core categories, a lack of concreteness in the nursing students' image of themselves as employed nurses was identified. The results suggest that supportive measures to improve the concreteness of the image that nursing students hold of themselves as employed nurses and of nursing work can reduce reality shock and prevent job turnover upon their entry into the workforce.

研究分野：看護教育

キーワード：看護学生 予期的社会化 就職後の自身のイメージ 就職後の現実 尺度開発

### 1. 研究開始当初の背景

近年、医療の高度化、複雑化に伴い、看護職員に高い能力が求められている。このような状況の中、厚生労働省医政局長の第七次看護職員需給見通しに関する検討報告会報告書では、看護職員の需要数が供給数を上回り、定着促進、養成促進、再就業支援にわたる看護職員確保対策について一層の推進を図っていくことが必要不可欠であると述べられている。その一方、病院看護実態調査による2016年度の看護職員離職率は10.9%、**新卒看護職員離職率は7.8%**であることが報告されている。内野ら(2015)の文献研究で、新人看護師の離職要因として最も件数が多かったのは「リアリティショック」であった。Dean et al(1988)は、職業的リアリティショックを「組織に所属する前に形成された個人の仕事への期待と組織メンバーになった後の仕事に対する知覚の相違」と定義している。そして、**予期的社会化段階に形成された期待と組織現実の相違がリアリティショックを生じさせることになる(尾形,2012)**。この**予期的社会化**とは、組織のメンバーが自らの役割を果たすために組織文化の知識や価値観の理解、もしくは必要な技能を習得するプロセスである**組織社会化の組織参入前の社会化**であり(Feldman,1976)、就職前の看護学生は予期的社会化の段階にある。尾形(2012)は、予期的社会化に影響を与える要因として、情報の質と情報源、訓練、予期的社会化の期間で抱かれる期待の3つをあげている。この要因には、看護学生という専門職の教育課程特有の臨地

実習が関連していることが考えられる。しかし、昭和26年の保健師助産師看護師養成所の指定規則制定時には、5,077時間あった教育時間は第4次カリキュラム改正後の現在では3,000時間と減少し、そのなかでも臨床実習時間は、3,927時間から1,035時間へと大幅に減少し、医療安全の観点から、実習での看護技術の実践が制限されている。このような現状に伴い予期的社会化の形成も変容してきていることが予測

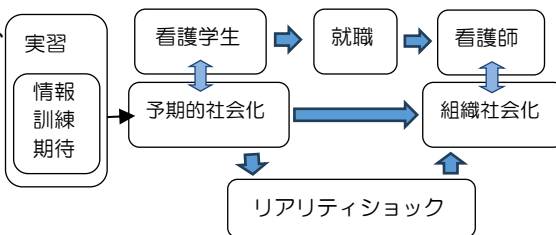


図1. 研究背景の概要

される。また、Jablin(1987)は、予期的社会化を幼少の頃からの様々な情報源から多くの職業に就いてイメージ形成される職業的予期的社会化と、特定の組織から受ける情報源によって当該組織のイメージ形成がなされ、その組織について理解する組織的予期的社会化に分類している。看護学生の場合、入学前に職業の選択が先行しているため、就職先を決定した時点からだけではなく、看護という職業を選択し、入学をしてきた時から卒業まで、Jablin の分類の双方を含めて、予期的社会化の形成について明らかにしておく必要がある。また、予期的社会化の形成が不十分であるとリアリティショックを助長し、深刻化すると職場適応を阻害し離職への引き金となる(平賀,2007)。従って、予期的社会化の形成を明らかにして尺度による測定を可能とし、予期的社会化を促進する手段を講じることが看護師の早期離職防止へと繋がると考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、(1) 看護学生の予期的社会化の概念化、(2) 看護学生の予期的社会化尺度を開発し、信頼性と妥当性を検証することである。

#### (1) 看護学生の予期的社会化の概念化

予期的社会化の主な内容は、「期待形成」であり、期待形成とは、個人が組織参入以前に、すなわち、組織の現状に直面しないままで、参入後の状況を肯定的に予測することである(高橋,1993)。この「組織の現状に直面しないままで、参入後の状況を肯定的に予測」した内容を、就職後の自身のイメージとして捉えた。そして、看護学生が就職直前に抱く就職後の自身のイメージと就職後の現実との相違を明らかにすることとした。

#### (2) 看護学生の予期的社会化尺度を開発し信頼性と妥当性を検証する

現時点では、(1)の成果しか出せておらず、今後(2)の目的についての研究を引き続き実施していく予定である。

### 3. 研究の方法

研究対象者は、看護系大学に所属する4年生で、看護師として病院に就職することが内定している8名と、病院に看護師として勤務している卒後2年以内の看護師10名であった。卒後2年以内の看護師には、学生時代を振り返ってもらい、すべての対象者にインタビューガイドに沿って半構造化面接にてインタビューを実施した。半構造化インタビューで得られた内容を逐語録にし、質的内容分析にて分析を行った。「看護学生が就職直前に抱く就職後の自身のイメージ」と、卒後2年以内の看護師に追加でインタビューをした「看護師として就職をした後の現実」の、各々に対応する内容を抽出、コード化した。その後、コードの相違点・共通点を比較分析し、カテゴリー化していった。分析の妥当性と厳密性は、質的研究経験のある研究者間で検討を行い確保した。その後、「看護学生が就職直前に抱く就職後の自身のイメージ」と、「看護師として就職をした後の現実」について、カテゴリー化した内容を比較して、イメージと現実の相違点につ

いて見出した。本研究は、川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号：18-033)。

#### 4. 研究成果

##### (1) 参加者の概要

参加者の詳細については表1に示す。

表1. 研究対象者の概要

##### ①看護学生

|        | 看護学生<br>A  | 看護学生<br>B | 看護学生<br>C | 看護学生<br>D | 看護学生<br>E | 看護学生<br>F | 看護学生<br>G | 看護学生<br>H  |
|--------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 性別     | 女性         | 女性        | 女性        | 女性        | 女性        | 女性        | 女性        | 女性         |
| 年齢     | 22歳        | 22歳       | 22歳       | 22歳       | 23歳       | 22歳       | 23歳       | 22歳        |
| 取得予定資格 | 看護師<br>保健師 | 看護師       | 看護師       | 看護師       | 看護師       | 看護師       | 看護師       | 看護師<br>保健師 |

##### ②看護師

|         | 看護師<br>A | 看護師<br>B | 看護師<br>C | 看護師<br>D | 看護師<br>E | 看護師<br>F | 看護師<br>G | 看護師<br>H | 看護師<br>I | 看護師<br>J |
|---------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 性別      | 女性       | 女性       | 女性       | 女性       | 女性       | 女性       | 男性       | 女性       | 女性       | 女性       |
| 年齢      | 34歳      | 22歳      | 23歳      | 22歳      | 21歳      | 22歳      | 31歳      | 21歳      | 26歳      | 25歳      |
| 看護師経験年数 | 4か月      | 1年4か月    | 4か月      | 1年4か月    | 4か月      | 1年4か月    | 1年4か月    | 4か月      | 1年4か月    | 4か月      |
| 勤務部署    | 外来       | 病棟       | 病棟       | 病棟       | 病棟       | 病棟       | 手術室      | 病棟       | 病棟       | 病棟       |

##### (2)看護学生が就職直前に抱く就職後の自身のイメージ

看護学生の就職後の自身のイメージについて分析した結果から、4つのコアカテゴリー、25のカテゴリー、73のサブカテゴリーが抽出された。抽出されたコアカテゴリーは、【就職後の生活】、【仕事への順応】、【職場への適応】、【キャリアの基盤形成】であった。

##### ①就職後の生活

コアカテゴリー【就職後の生活】は、「自分で選んだ地域で暮らしている」、「仕事を中心とした生活を送っている」、「仕事と私生活とを両立させている」、「理想的な労働環境の中で働いている」、「不規則な勤務をこなしている」、「交代勤務に対して身体的な適応ができています」の6つのカテゴリーで構成された。

##### ②仕事への順応

コアカテゴリー【仕事への順応】は、「未経験の看護技術を身につけている」、「仕事の中で看護技術が身につけている」、「先輩の指導を受けながら仕事を覚えている」、「新人研修で仕事の基礎を学んでいる」、「仕事の厳しさに直面している」、「希望でない部署に配属されても耐え抜いている」、「学生時代に経験の少ない看護業務を実践している」、「自信をもって患者に看護をしている」の8つのカテゴリーで構成された。

##### ③職場への適応

コアカテゴリー【職場への適応】は、「チームで連携して働いている」、「雰囲気の良い職場風土の中で働いている」、「看護師のコミュニティに馴染んでいる」、「厳しい先輩とも一緒に働いている」、「学生ではなく看護師の仲間として扱われている」、「同期の看護師と切磋琢磨している」、「馴染めない時には看護部で対応してもらっている」の7つのカテゴリーで構成された。

##### ④キャリアの基盤形成

コアカテゴリー【キャリアの基盤形成】は、「段階を経てひとり立ちをしている」、「新人期を乗り越えている」、「希望の領域で専門性を高めている」、「仕事の中でキャリアを方向付けている」の4つのカテゴリーで構成された。

##### 【考察】

本研究の就職後の生活のイメージの特徴として、実習時間内で実際に見る事ができていたものは概ねイメージができていたが、見る事ができなかった事象のイメージが明確ではないことが明らかになった。実習時間外の看護師の業務については、実際に見る事ができていないため、イメージができるほどの情報量がなかったと考えられる。

看護学生は、就職後に身体の保清などの生活援助技術はひと通りできることを確信していた。その一方で、患者に侵襲のある看護技術については、就職直後には自立して実践ができないため、不安を感じていた。また、就職直後は順調に経過をしていくだけではなく、仕事の厳しさにも直面し、困難を乗り越えていくイメージもあり、それに対して覚悟をしている様子が見られ、看護学生の就職後の自身のイメージの特徴であるとも言える。

就職先に関する情報の集め方には多様性があったが、いずれも自分が看護師で就職した時に働きやすい職場であるかを確認していた。Wanous (1973) は、リアリティショックによる離職を

防ぐためにRJP (realistic job preview) を提唱している。病院説明会などで、病院の基本的な情報に加え、不安にさせない程度の現実的な話も織り交ぜて看護学生へ伝えることで、リアリティショックを最小限に抑えることが可能となると考える。

Super, D.E (1957)は、キャリア発達を成長期、探索・試行期、確立期、維持期、下降期の5つの段階に分けている。看護学生は探索・試行期にある。自分のキャリアの方向づけをし、基盤を形成する時期であるからこそ、結果のようなイメージが形成されたと考えられた。

### (3) 看護師として就職をした後の現実

看護師として就職をした後の現実について分析した結果、4つのコアカテゴリー、14のカテゴリー、23サブカテゴリーが抽出された。コアカテゴリーは、看護学生が就職直前に抱く就職後の自身のイメージで抽出された4つのコアカテゴリーと一致した。

#### ① 就職後の生活

コアカテゴリー【就職後の生活】の現実は、「生活の変化に心身が適応できない」、「勤務形態の複雑さに戸惑う」、「夜勤が身体に大きな負担となる」、「看護師の働き方の現実に戸惑う」というネガティブなものから、「交代勤務の空いた時間を有効に使える」、「金銭的な余裕が出てくる」というポジティブなものを含め、6つのカテゴリーで構成された。

#### ② 仕事への順応

コアカテゴリー【仕事への順応】の現実は、「自分の能力以上の仕事を求められる」、「常に時間が足りない」、「想定外の業務をこなさなければならない」、「思ったように患者と関わる余裕がない」、「看護師としての責任の重さを感じる」の5つのカテゴリーが抽出された。

#### ③ 職場への適応

コアカテゴリー【職場への適応】の現実は「女性が多いが働きやすい」というカテゴリー1つだった。

#### ④ キャリアの基盤形成

コアカテゴリー【キャリアの基盤形成】の現実は、「希望部署に配属されず憂鬱な日々を過ごす」、「今後のキャリアについて考える余裕がない」の2つのカテゴリーで構成された。

#### 【考察】

新人看護師は、就職までに看護師として働くことの具体的なイメージが掴めていないまま就職後の生活に突入し、適応していくことに困難感を感じていた。新人看護師にとって就職後の生活の変化は予想外なことが多く、適応が困難であることが考えられた。

臨地実習で行ってきた看護と、看護師の仕事との間には多くの相違があり、これがリアリティショックの原因となる。看護師の業務内容に関するリアリティショックを軽減するには、看護基礎教育で現実の看護業務に近い形の実習を取り入れることや、病院でのアルバイトや共同活動の機会を増やすことなどが有効と考える。また、就職後に新人看護師個々の成長に応じて業務量を調整し、少しずつ仕事に順応していけるように支援していくことが求められる。

### (4) 就職直前に抱いた就職後の自身のイメージと就職後の現実との相違

就職直前に抱いた就職後の自身のイメージと就職後の現実との相違について図1に示す。

#### ① 就職後の生活

コアカテゴリー【就職後の生活】のイメージは、「仕事と私生活とを両立させている」であったが、現実には「生活の変化に心身が適応できない」ことが起こっていた。この他、「不規則な勤務をこなしている」、「交代勤務に対して身体的な適応ができていない」ことをイメージしていたが、現実には「勤務形態の複雑さに戸惑う」、「看護師の働き方の現実に戸惑う」、「夜勤が身体に大きな負担となる」ということが起こっていた。

#### ② 仕事への順応

コアカテゴリー【仕事への順応】についてのイメージは、「未経験の看護技術を身につけている」、「看護技術が仕事の中で身につけている」、「先輩の指導を受けながら仕事を覚えている」、「新人研修で仕事の基礎を学んでいる」であった。これに対

|        | 看護学生の就職後の自身のイメージ  | 看護師として就職をした後の現実                                     |
|--------|---|---|
| 就職後の生活 | 仕事と私生活とを両立させている   | 生活の変化に心身が適応できない                                     |
|        | 不規則な勤務をこなしている<br>交代勤務に対し身体的な適応ができていない   | 勤務形態の複雑さに戸惑う<br>看護師の働き方の現実に戸惑う<br>夜勤が身体に大きな負担となる    |
|        | 未経験の看護技術を身につけている<br>未経験の看護技術を身につけている<br>先輩の指導を受けながら仕事を覚えている<br>新人研修で仕事の基礎を学んでいる | 自分の能力以上の仕事を求められる<br>常に時間が足りない<br>想定外の業務をこなさなければならない |
| 職場への適応 | 自信を持って患者に看護をしている  | 思ったように患者と関わる余裕がない<br>看護師の責任の重さを感じる                  |
|        | チームで連携して働いている<br>チームで連携して働いている<br>看護師のコミュニティに馴染んでいる<br>厳しい先輩とも一緒に働いている          | 女性が多いが働きやすい   |
| キャリア形成 | 女性が多いが働きやすい   | 厳しい先輩とも一緒に働いている<br>厳しい先輩とも一緒に働いている                  |

図1. 就職直前に抱いた就職後の自身のイメージと就職後の現実との相違

し現実には、《自分の能力以上の仕事を求められる》、《常に時間が足りない》というものであった。

### ③職場への適応

コアカテゴリー【職場への適応】のイメージは、《チームで連携して働いている》、《雰囲気の良い職場風土の中で働いている》、《看護師のコミュニティに馴染んでいる》、《厳しい先輩とも一緒に働いている》など職場の中でチームに打ち解けているものであったが、現実には《女性が多いが働きやすい》というものであった。

### ④キャリアの基盤形成

コアカテゴリー【キャリアの基盤形成】では、《仕事の中でキャリアを方向付けている》ことをイメージしていたが、現実には、《今後のキャリアについて考える余裕がない》、《希望部署に配属されず憂鬱な日々を過ごす》というものであった。

#### [考察]

本研究の結果から、看護学生が就職直前に抱く就職後の自身のイメージと就職後の現実の相違は、看護基礎教育での情報と臨地実習での体験の不足が原因であることが考えられた。近年は、医療安全の観点から臨地実習で患者に侵襲のある看護技術を実践は制限され、経験する機会が少なく、実習時間も大幅に減少している。したがって、イメージと現実の相違を埋めるには、実習体験の不足に関しては、看護基礎教育での臨地実習や学内演習の内容を就職後の現実に近い状態に近づけていくことを検討する必要がある。また、臨床側からは、学生が就職先の情報収集で、病院説明会やインターンシップに参加した際に、就職後の仕事内容と、勤務パターンや夜勤についての具体的な情報を提供することが必要である。相違が明らかとなったイメージを現実へと近づけることで、リアリティーショックを和らげ、離職の防止へとつながると考える。

### 引用文献

Dean, R. A., Ferris, K. R. and Konstans, C. (1988). Occupational reality shock and organizational commitment: evidence from the accounting profession, *Accounting Organizations and Society*, 13(3), 235-250.

Feldman, D. C. (1976). A contingency theory of socialization, *Administrative Science Quarterly*, 21, 433-452.

平賀愛美, 布施淳子(2007). 就職後3か月時の新卒看護師のリアリティーショックの構成因子とその関連要因の検討. *日本看護研究学会雑誌*, 30(1), 97-107.

Jablin, F. M. (1987). Organizational entry, assimilation, and exit, In Jablin, F. M., Putnam, L. L., Roberts, K. H., & Prter, L. W. (Eds.), *Handbook of Organizational Communication*, Saga Publications, 679-740.

公益社団法人日本看護協会医療政策部編(2017). 日本看護協会調査研究報告〈No. 91〉2016年病院調査実態報告.

<https://www.nurse.or.jp/nursing/home/publication/pdf/research/91.pdf>. (参照 2023-5-20).

厚生労働省医政局長(2022). 第七次看護職員需給見通しに関する検討報告会報告書.

<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000000z68f-img/2r9852000000z6df.pdf>.

(参照 2023-5-20).

尾形真実哉(2012). リアリティーショック (reality shock) の概念整理. *甲南経営研究*, 53(1), 85-126. <http://doi.org/10.14990/00002075>.

Super, D. E. (1957). *The Psychology of Careers: an Introduction to Vocational Development*, Harper & Brothers.

高橋弘二(1993). 組織社会化研究をめぐる諸問題-研究レビュー-. *経営行動科学*, 8(1), 1-22.

内野恵子, 島田涼子 (2015). 本邦における新人看護師の離職についての文献研究. *心理健康科学*, 11(1), 18-23.

Wanous, J. P. (1973). Effects of a realistic job preview on job acceptance, job attitudes, and job survival. *Journal of Applied Psychology*, 58, 327-332.



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

|  |                           |
|--|---------------------------|
| 1. 著者名<br>Akada Izumi, Ishii Atsue, Yamaguchi Akiko, Fukushige Haruna, Mitani Rie, Ito Akiko, Nakajima Akihito, Suga Sayaka  | 4. 巻<br>14                |
| 2. 論文標題<br>Discrepancy between the Image Held by Nursing Students of Themselves as Employed Nurses during the Pre-Employment Period and the Post-Employment Reality Faced by Novice Nurses | 5. 発行年<br>2022年           |
| 3. 雑誌名<br>Health   | 6. 最初と最後の頁<br>1244 ~ 1266 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.4236/health.2022.1412088   | 査読の有無<br>有                |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）  | 国際共著<br>-                 |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>赤田いづみ、西田洋子、福重春菜、石井豊恵                          |
| 2. 発表標題<br>新人看護師が感じた仕事上の困難と看護基礎教育での支援の検討 - 予期的社会化促進の観点から |
| 3. 学会等名<br>第40回日本看護科学学会学術集会                              |
| 4. 発表年<br>2020年  |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                     | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                     | 備考 |
|-------|---|---|----|
| 研究分担者 | 伊東 美佐江<br><br>(Ito Misae)<br><br>(00335754)   | 山口大学・大学院医学系研究科・教授<br><br><br><br>(15501)  |    |
| 研究分担者 | 石井 豊恵<br><br>(Ishii Atsue)<br><br>(00452433)  | 神戸大学・保健学研究科・教授<br><br><br><br>(14501)     |    |
| 研究分担者 | 西田 洋子<br><br>(Nishida Yoko)<br><br>(10782237) | 川崎医療福祉大学・保健看護学部・講師<br><br><br><br>(35309) |    |

6. 研究組織（つづき）

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)   | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-------|-----------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 山口 亜希子<br>(Yamaguchi Akiko) |                       |    |
| 研究協力者 | 福重 春菜<br>(Fukushige Haruna) |                       |    |
| 研究協力者 | 三谷 理恵<br>(Mitani Rie)       |                       |    |
| 研究協力者 | 伊藤 朗子<br>(Ito Akiko)        |                       |    |
| 研究協力者 | 中嶋 章仁<br>(Nakajima Akihito) |                       |    |
| 研究協力者 | 菅 綾香<br>(Suga Sayaka)       |                       |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|         |         |